

卒業論文

観光によるまちづくりと  
地域住民の主体性  
——フィルム・ツーリズムの事例から——

2013 年度入学

九州大学文学部人文学科人間科学コース

社会学・地域福祉社会学専門分野

2016 年 1 月提出

## 要旨

本論文では、大分県の地方都市をロケ地とした映画を題材として取り上げる。近年、映画やアニメのロケ地を巡る観光形態、いわゆる「聖地巡礼」が流行している。ロケ地に選ばれた場合、観光客の増加などから地域活性化が見込めるため、様々な自治体がフィルム・コミッションを設立するなどの形でロケの受け入れ体制を整え、積極的な誘致をおこなっている。

このような、コンテンツを動機とした観光形態を「コンテンツ・ツーリズム」、映像によるものを「フィルム・ツーリズム」と呼び、社会学の分野でも注目を集めるようになってきている。ただし、これまでの研究では、観光客の増加や経済効果など、目に見えやすい点に焦点を当てているものがほとんどであった。そこで本論文では、これまで先行研究であまり触れられていない「新たなネットワーク形成」と「地域資源の再認識」という2点からフィルム・ツーリズムによる地域活性化を検討した。

また、フィルム・ツーリズムに限らず、観光によるまちづくり全般についても考察し、フィルム・ツーリズムとその他の観光形態によってどのような違いが見られるのかを明らかにした。観光まちづくりを目指すうえでは、住民の主体性が欠かせないことが先行研究で明らかにされている。まちを観光化するにあたって、行政や外部組織などが主体となりおこなっていく場合、住民の持っていたまちのイメージからかけ離れていく場合がある。住民が誇りを持って暮らし続けることができるまちを目指すためには、住民の積極的な参加が重要である。本論文では、住民の主体性をキーワードに、「小さな地方都市がこれからも存続するためには、なにをすべきか」について検討する。

章ごとの内容は以下の通りである。

まず、「はじめに」で問題設定やテーマ設定に至った経緯について述べた。

第1章では、先行研究の整理をおこなった。「観光社会学とは何か」、「観光まちづくりとは何か」ということについて知見を得た。観光社会学とは、現代観光を対象とし、観光から手がかりを得て、あるいは、観光を活用して、よりよい社会としての「持続可能な社会」の構想を実践しようとしている学問である。観光まちづくりとは、文字どおり「観光」を活用する「まちづくり」であり、本質は「内発性」と「持続可能性」の2点にあるとされている。

第2章は、調査対象とした大分県の地方都市の概要を述べている。観光による振興に力

を入れており、観光資源に恵まれているが、人口減少や少子高齢化などの課題を抱えている。また、市民アンケートの結果から、地域住民が地域に対して愛着を持っていることがわかった。

第3章は、調査対象とした映画の概要である。ロケ地となったまちでは、単に映画ロケに協力するのみではなく、映画による地域活性化に向けた様々な取り組みがおこなわれた。

第4、5、6章は、映画ロケに携わった人々に対しておこなった聞き取り調査の結果である。調査に関しては、本映画ロケに中心として行政の立場から関わった3人と、ロケ地となった商店の店主の計4人への聞き取り調査をおこなった。質問内容は、映画ロケ誘致による成果やまちづくりに対する考えである。行政と地域住民、それぞれの立場の違いを分析した。

第7章では、先行研究や3度の聞き取り調査の結果を分析、考察した。本映画ロケの課題としては、「限定的な効果」、「映画に関わる人の負担」の2点を挙げた。効果として、「地域の魅力の再認識」、「無関心層のまちづくり参加」、「新たな観光資源の発掘」の3点を挙げた。そして、冒頭で述べた「新たなネットワーク形成」と「地域資源の再認識」の2点の達成度を検討した結果、前者は限定的で、後者は継続性に課題は残るものの達成していた。本章の最後にまとめとして、「イベントが果たす役割」、「後継者不足から生じる問題と解決に向けて」、「住民のまちづくりへの参加と継続」、「会話の重要性」という4点に言及した。

「おわりに」では、「小さな地方都市がこれからも続いていくためには」という課題に対しての解決策として、「解決するためには、住民一人ひとりが地域に愛着を持って、主体的にまちづくりに関わっていくことが必要である」ということを見出した。また、本論文が明らかにしたことの整理をおこなった。例えば、「持続可能な観光」の実現に向けて、観光地側、観光客側ともに主体化が進んでいるという社会全体の流れや、本映画がロケ地となったまちの観光に果たした役割を明らかにした。本映画の効果は、「一過性のもの」であり、そのまちの抱える課題を根本から解決することはできなかった。しかし、今後もこのようなイベント的な取り組みを、継続的な取り組みとともにおこなっていくことで、大きな効果を生み出すことができるだろう。また、商売を営む住民の後継者不足という悩みから、次世代に受け継ぐことが、まちづくりに積極的に参加するための原動力となることを明らかにした。そして、観光まちづくりには「会話」が重要である。会話が地域への愛着を生み出し、住民自身が住みよいまちづくりを目指すことが「持続可能な観光」の実現に

つながる。最後に、反省点として「住民への聞き取り調査不足」をあげ、今後の課題はさらなる調査を進めることとして本論文を締めくくった。

## 目次

はじめに .....	1
1 先行研究の整理 .....	3
1.1 観光社会学とは .....	3
1.2 観光社会学の対象 .....	3
1.3 観光社会学の視点 .....	4
1.4 観光のまなざし .....	5
1.5 現代観光の特徴 .....	5
1.6 観光におけるメディアの力 .....	6
1.6.1 コンテンツ・ツーリズム	
1.6.2 フィルム・ツーリズム	
1.6.3 シネマ・ツーリズム	
1.6.4 観光客と地域住民の交流の重要性	
1.7 観光によるまちづくりと地域住民の意識 .....	10
1.7.1 まちづくりとは	
1.7.2 観光まちづくりとは	
1.7.3 外部人財の役割	
1.7.4 地域における観光対象の生成	
1.7.5 観光まちづくりの成功とは	
1.8 観光地住民の意識 .....	13
1.8.1 由布院	
1.8.2 門司港	
2 X市について .....	17
2.1 X市の観光資源 .....	17
2.2 X市民アンケートの結果より .....	18
2.2.1 まちづくりについて	
2.2.2 愛着と印象について	

2.3	先行研究より	19
2.3.1	地域における観光対象の生成	
3	映画『サブイボマスク』について	21
3.1	映画の概要	21
3.2	映画ロケを誘致した目的	21
3.3	映画のプロモーションによる地域活性化	21
3.4	先行研究より	22
3.4.1	映画によって作り出された観光地イメージ	
3.4.2	外部人材の役割	
4	調査1	24
4.1	映画ロケ誘致による成果	24
4.2	映画ロケを受け入れるために必要なもの	24
4.3	映画ロケ中の苦勞	25
5	調査2	26
5.1	映画ロケ誘致による成果	26
5.2	映画ロケを受け入れるために必要なもの	27
5.3	映画ロケ中の苦勞	27
5.4	観光と行政の関係性	28
6	調査3	29
6.1	映画ロケ誘致による成果	29
6.2	ロケ地に選ばれた経緯	29
6.3	映画と地域住民の関わりについて	30
6.4	映画ロケを引き受けることの負担について	30
6.5	X市のまちづくりへの関わり	30
6.6	X市が抱える課題	31

7 考察	32
7.1 課題	32
7.1.1 限定的な効果	
7.1.2 映画に関わる人の負担	
7.2 効果	32
7.2.1 地域の魅力の再認識	
7.2.2 無関心層のまちづくり参加	
7.2.3 新たな観光資源の発掘	
7.3 達成度	34
7.3.1 「新たなネットワーク形成」の達成度	
7.3.2 「地域資源の再発掘」の達成度	
7.4 まとめ	35
7.4.1 イベントが果たす役割	
7.4.2 後継者不足から生じる問題と解決に向けて	
7.4.3 住民のまちづくりへの参加と継続	
7.4.4 会話の重要性	
おわりに	40
注	41
文献	42